

「ひとりの主からすべてが」

(1 コリ12:1~11)

挽地 茂男

2019.3.10 日本基督教団千歳丘教会礼拝

サグラダ・ファミリアという、2005年に世界文化遺産に登録され、今や、アルハンブラ宮殿やマドリッドのプラド美術館を抜いてスペイン最大の観光スポットとなった教会がスペインのバルセロナにあります。よくご存知かと思えます。正式名称はカタルーニャ語〔スペイン東部のカタルーニャ州の言葉〕でTemple Expiatori de la Sagrada Família (聖家族贖罪教会)、日本語ではふつう「聖家族教会」と呼ばれています。着工は1882年(明治15年)3月19日で、137年目を迎える今も建築が続いています。すべて個人の献金・寄付によって建設される教



会として計画されましたので、途中、資金難で工事が停滞することもありましたが、1990年代から拝観料収入が増えて、状況が好転します。さらに2005年には世界文化遺産に登録され、現在、年間300万人前後(2008年270万人)の観光客が押し寄せるスペイン最大の観光スポットになっています。

このサグラダ・ファミリアの建築に加わっている日本人がいることもご存知かも知れません。ネスカフェのコマーシャルに出演して一躍有名になった人です。サグラダ・ファミリア主任彫刻家の外尾悦郎(そとお えつろう、1953年-)さんという方です。外尾氏は福岡県立福岡高等学校から京都市立芸術大学美術学部彫刻科を卒業し、1978年25歳の時にバルセロナに渡りアントニ・ガウディの建築サグラダ・ファミリアの彫刻部門に携わります。2013年に専任彫刻家となり〔それまでの34年間は専任ではなく、同僚曰く「長い試験期間」を過ごし〕現在は主任彫刻家として働いておられます。①2000年に完成させた「生誕の門」が2005年、アントニ

・ガウディの作品群としてユネスコの世界遺産に登録されます。その他、②リヤドロ・アートスピリッツ賞、福岡県文化賞（2002年、交流部門）を受賞し、③日本とスペインとの文化交流の促進の功績により2008年度外務大臣表彰を受け、④2012年、国際社会で顕著な活動を行い世界で「日本」の発信に貢献したとして、内閣府から「世界で活躍し『日本』を発信する日本人」の一人に選ばれます。外尾悦郎氏の彫刻の仕事もサグラダ・ファミリアの建設も、「ゆっくり、しっかり」となされている、あるいは「ゆっくりだけれど、しっかり」なされている、という印象を強く持ちます。良いものは「ゆっくり、しっかり」と造られることが必要なのだと思います。

わたしたちは今、コリントの信徒への手紙一から教会を建てあげるための三つの章を読んでいます。その三つの章とは、3章、12章、13

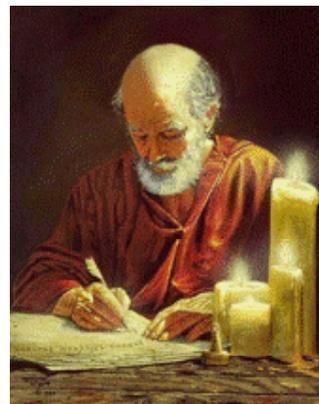


外尾悦郎とサグラダ・ファミリア（スペイン）

章ですが、先週3章を読み終わりました。本日から12章を読みたいと思います。12章のパウロの言葉はこう始まります。12章1-3節。

12:1 兄弟たち、霊的な賜物については、次のことはぜひ知っておいてほしい。

12:2 あなたがたがまだ異教徒だったころ、誘われるままに、



執筆中のパウロ

ものの言えない偶像のもとに連れて行かれたことを覚えているでしょう。12:3 ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。

「兄弟たち」で始まる出だしの第1節の「霊的な賜物」という言葉（*πνευματικῶν*）には、もともと「賜物」という言葉が使われてはおらず、「霊的な」という形容詞の複数形が単独で使われているだけなのです。ですから新共同訳は、省略されている言葉を推測して——12章全体のテーマが「賜物」で

もあるので——「賜物」を補足して訳したのです。素直に直訳すると「**霊的な事柄**」〔口語訳「霊の賜物」、新改訳「御霊の賜物」、NKJV “spiritual gifts,” 挽地「**霊的な事柄**」〕となります。こう訳すべきです。こう翻訳しないと、次の2節との関連——つまり後続



アポロ神と神殿

する偶像礼拝との関連——が見えてこないのです。1節を直訳して続けて2節を(新共同訳で)読んでみます。「兄弟たち、**霊的な事柄**については、わたし

は、あなた方に無知でいてほしくありません。12:2 あなたがたがまだ異教徒だったころ、誘われるままに、ものの言えない偶像のもとに連れて行かれたことを覚えているでしょう。」

論理展開は明白です。霊的な無知のゆえに「物の言えない」——つまり「無力な」——偶像に誘われていく。しかし真の霊の働きは、「**ものの言えない偶像**」とは違っ

て、その関係が言葉に表れる。神の霊は人をして語らせる、と続いていくのです。3節も読んでおきましょう。「12:3 **ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。」**異教徒であったときの霊的体験と、キリスト者になるという霊的体験が二つのポイントで述べられています。1つは①「**誘われるままに**」また「**連れて行かれた**」という言葉が、異教徒であったときの霊的体験の特徴を表します。この受動態は、コリントの人々の主体的な意志とは異なるところに、彼らの行動の源泉があることを示します。しかも「**連れて行かれた**」所は、偶像のもとだったというのです。これが偶像(異教の霊)の力なのです。「**誘われるまま**」(ὡς ἂν ἤγεσθε)無自覚なままに——言い換えれば自然な流れで——「**偶像のもとに連れて行かれ**」(ἀπαγόμενοι)なのです〔ἀγωとἀπάγω(誤り導かれる、引き寄せられる)〕。もう一つの特徴は先ほど見ましたように、②言葉

に関係しています。「ものの言えない偶像」とキリスト教の言語活動が対比的にイメージされている。ものの言えない「偶像」と「神の霊によって語る人」が対比されます。つまり霊の働きは言葉の働き(活動)に現れてくるのです。キリストの霊によって語る人は、「イエスは神から見捨てられよ」とは言わず、「イエスは主である」と語るのです。

神の霊と言語活動の関連は、ペンテコステの物語によく現れています。ペンテコステの日には「多言奇跡」と呼ばれる奇跡が起こります。エルサレムには五旬祭(逾越祭から50日目の祭)に参詣する人々が、イスラエル以外の外地(外国)から神殿に詣でるためにエルサレムに上京して、ごった返しています。はたして主イエスの約束通り、聖霊が降臨すると、ガリラヤの人である主イエスの弟子たち



が、外地から上京した人たちが生まれた、あるいは生活しているその外地(故郷)の言葉で話しているです。使徒言行録2章5-11節。2:5 さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、2:6 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。2:7 人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。2:8 どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。2:9 わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、2:10 フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、2:11 ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

イスラエル以外の外地(外国)で生まれた人たちは、神殿に詣でるために外地からエルサレムへと上ってきたのですが、そこで聞いたのは、彼らの生まれた出身地、故郷の言葉(v. 6 τῆ ἰδίᾳ διαλέκτῳ)でした。しかも主イエスの弟子たちは、同じメッセージ「神の偉大な業」(v. 11 **十字架と復活による救い**)を各地の方言で語っていたのでした。1つのメッセージが多言語で、



ピーテル・ブリューゲル「バベルの塔」1563

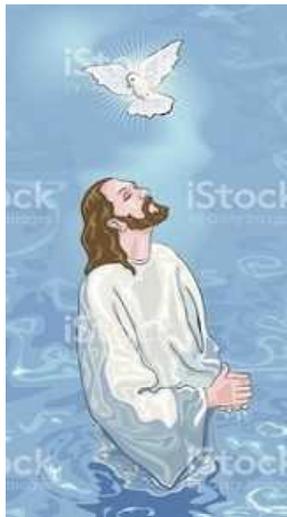
理解可能な内容として語られていたのです。ここで起こっているのは、旧約聖書のバベルの塔の事件とは、非常に対照的な出来事です。バベルの塔の事件では、人間の使う言語が1つであるために、人間はその悪意を共有して、天の神にまで届こうと、バベルの塔を建設します。その人間の企てを見抜いた神は、人間の言葉を混乱させて、彼らの作為を砕きます。多言語となった人間の言葉は、共通の悪意を交換する手段として使えなくなります。こうして神は、言葉の混乱によって人間の文化的傲慢を砕

かれたのです。これとは対照的に、聖霊降臨の出来事は、多言語の世界に聖霊が下ります(聖霊降臨)。これによって人々は、多言語に生きながら同じ一つのメッセージを共有します。彼らはこのメッセージによって一つ思いとされるのです。神はご自身の霊(川田殖「神の思いと力」)を注いで、言語の壁を超えられたのです。

^{ペンテコステ}聖霊降臨は人々のコミュニケーションの新たな可能性を示しています。今読みました使徒言行録に出てくる民族表を見るとよく分かります。まず(1)パルティア、メディア、エラムからの者(v. 9)たちは、東方からやって来た人たちです。次いで(2)メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、2:10 フリギア、パンフィリア(v. 9-10)、つまり北西に至り、さらに(3)エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者(v. 10)つまり南西へと続きます。そして(4)ローマから来て滞在中の者(v. 11)もおり、(5)ユダヤ人も、ユダヤ教への改宗者もおり(v. 11)、(6)クレタ、アラビアから来た者もいる(v. 11)のです。つまり西方の「海洋民族」と東方の「内

陸民族」を包摂しているのです。ペンテコステの物語は、世界宣教の発端を飾る出来事を伝えているのです。

①神の霊によって語る人は「イエスは神から見捨てられよ」とは言いません(v.3)。



あなたは私の愛する子

②信じた者(入信者)は聖霊によって「イエスは主である」(v.3)と告白するのです。神の霊はわたしたちに、神に向かって声を上げさせるのです。神を呼ばせるのです。

③「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです」(ロマ 8:15)。また④「あなたがたが(神の子)であることは、神が、「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります」(ガラ4:6)。

⑤主イエスがヨルダン川で洗礼を受けられたとき、天が裂けて聖霊が鳩のように主イエスの上に降ります。そして天の父は、主イエスを

「わたしの愛する子」と宣言されます。マルコによる福音書1章9-11節(並行)。

マル1:9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。1:10 水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。1:11 すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

信仰の始まり(イエスを主と告白する時)から教会と信徒を導く神の霊が、教会に、教会を建てあげるために必要な賜物を与えてくださるのです。その特徴は多様性と統一性です。「いろいろ」と「同じ」という言葉を使って、パウロは、1つの事柄を3つの側面から語ります。1コリ12章4-6節。12:4 賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。12:5 務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。12:6 働きにはいろいろあ



アッバ、父よ



りますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。

「賜物はいろいろ」「務め(奉仕)はい

ろいろ」「働きはいろいろ」と多様です。しかし、「同じ霊」、「同じ主」、「同じ神」がそれらを1つに統合なさるのです。「霊」と「主」と「神」は三位一体的な神感覚です〔思想としては未発達ですが〕。聖なる霊と主なるキリストと父なる神が教会の営みを支え豊かにする源なのです。

「賜物」はカリスマ(*χάρισμα*)というギリシア語です。カリスマとは「恵み」(*χάρις* カリス)が具体的な形を取った、一つ一つの賜物や才能という意味です。一般に考えられているような「強烈な指導力」という意味ではありません。指導者は神の恵みに満たされていなければなりません。ですから、穏やかなカリスマ的リーダーも当然いるのです。カリスマ美容師とは、美容師としての才能に豊かに恵まれた人のことです。

「務め」という言葉はもともと「食卓に使えること」という意味

の言葉です。「給仕」と訳してもいいのですが、「奉仕」くらいの訳がいいでしょう。「賜物」を用いて「奉仕」すると、そこに「働き」が生じます。「賜物」と「務め」と「働き」は別々のものではありません。教会は主の僕たちが、それぞれの「賜物」を用いた主体的な「奉仕」による「働き」に支えられています。

しかしわたしたちの働きの、もう一つ別の面に気をつけておく必要があるのです。6節をもう一度読んでみましょう。「12:6 働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。」人間が消し飛んでいます。「すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。」パウロが人間の働きを大切に考えていることは、勿論のことです。しかし多くの教会を建設してきたパウロにとって、「神が働いてくださる」という確信は決定的だっ



たのです。すべての働きのエネルギー源 (ἐν-ἐργεια 働き, 力, 仕業, 作用, 活動) は神にあるのです。



アントニ・ガウディ

先ほど紹介したサグラダ・ファミリア主任彫刻家の外尾悦郎氏はこのようなことを語っています。サグラダ・ファミリアの建築においてどのようなものを作っていくべきか思案したり、迷ったりするときには、「同じ方向を見ること」を心がけるといいます。誰と同じかというと、サグラダ・ファミリアの建設を決定的に方向付けた二代目の設計家アントニ・ガウディです。こう語っています。「(そのようなときには)ガウディが見ている方向(未来)を見ることにした。同じ方向を見ることで、自然と彼が何を作りたいかが分かるようになった。」教会を建て上げる業も(こそ)「**主と同じ方向を見る**」ことによって、前進していくのだと思います。また外尾氏はこうも言います。「何が起こってもオリジン(原点)に戻る。」しかしこのオリジン(原点)はガウディよりもさらに奥深いオ

リジン(原点)を指しています。つまり「ガウディが遺した『オリジナリティとは、オリジンに戻ること』『人間は創造しない。自然のなかから発見するだけだ』という言葉が、大きな指針になってくれます。」「迷ったときには、オリジン、つまり原点(ガウディ、自然)に立ち戻って見直し、考え直してみることがオリジナリティだと、ガウディは言っているんです。」

原点に戻ること、教会がこの世界に誕生する歴史的原点に立ち戻ること、そして教会を誕生せしめた神という原点に立ち戻ること、神と主キリストと同じ方向に目を向け、そして神の道を発見すること、それがわたしたちに託された課題なのです。

そして教会を構成する一人一人の賜物と務め(奉仕)と働きが全体を築いていきます。7-11節。

12:7一人一人に“**霊**”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。12:8 ある人には“**霊**”によって知恵の言葉、ある人には同じ“**霊**”によって知識の言葉が与えられ、12:9 ある人にはその同じ“**霊**”によって信仰、ある人にはこの唯一の“**霊**”によって病気を

いやす力、12:10 ある人には奇跡
を行う力、ある人には預言する力、
ある人には霊を見分ける力、ある
人には種々の異言を語る力、ある
人には異言を解釈する力が与えら
れています。12:11 これらすべての
ことは、同じ唯一の“霊”の働
きであって、“霊”は望むままに、
それを一人一人に分け与えてくだ
さるのです。

「一即多、多即一」(One for All,
All for One)。「一人一人に“霊”
の働きが現れるのは、全体の益
となるためです。」一即多、多即
一は仏教用語で、その中でも華嚴
思想・天台思想の用語です。日本
で言うと奈良の大仏で有名な東大
寺が華嚴宗。天台宗は比叡山延暦
寺が有名です。「一即多、多即一」
という言葉は華嚴経に出てきま
す。「一即多」をだらだらと読む
と、「一緒くた」と聞こえてきま
すが、実はこの「一緒くた」とい
う言葉は「一即多」が語源だとす



る説があります。雑多な物事が秩
序なく一つになっていること、ま
たごちゃまぜであることを一緒く
たと言います。雑多なものをまと
めところから、「くた」は「がら
くた」の「くた」と同じく、ゴミ
を意味する「あくた(芥)」の「く
た」とする説が定説です。

しかし神の霊が与えてくださる
賜物は、ゴミではありませんし、
それらは一つに統合されて、一緒
くたにはしないのです。それぞれ
の違いと、それぞれの価値の認識
が大切なのです。賜物と務めと働
きには「いろいろあります**が**」、
それらの違いの認識が必要です。
差異を前提とした上で、賜物と務
めと働きには「いろいろあります
が」の「**が**」が大切になるのです。
それらの相違は同一の(発生)源を
持つのです。「多」があるからこそ
「一」が生き、「一」があるからこそ
「多」が生きるのです。体には多く
の部分がありながら、全体として
一つの体であるのと同じです。

霊の賜物が列挙されています。
それらは多様ですが、整理が可能
です。まず1つ目に①言葉に関わ
る賜物をまとめることができます。
5つリストされています。(1)

知恵の言葉、(2)知識の言葉、(3)預言する力、(4)種々の異言を語る力、(5)異言を解釈する力です。

(1)知恵の言葉と(2)知識の言葉は、蓄積すべき言葉、大切に蓄積すべき言葉です。つまりそれらの言葉の持つ継続性や伝統性や保守性が集団(教会)に安定性をもたらすのです。次に(3)預言する力が



預言者イザヤ

賜物としてリストされています。預言者は、時代や状況に即応して神から神の言葉を聞き、聖霊によって語る者なのです。時代や状況を見きわめ、神の言葉を直接的に伝達する者が預言者です。旧約聖

書では「神の口」と呼ばれる人たちです。預言の持つ時代性や革新性が、教会が伝統や時代に埋没することを防ぐのです。さらに教会には、(4)種々の異言を語る力が賜物として与えられます。異言とは、通常を超えた言葉です。通常の方法や用語法で表現できない宗教経験を表します。神秘主義(Mysticism)という言葉の語源は、

ギリシア語の〈ミュエイン μύειν〉という「(口・目・耳を)閉じる」という意味を持つ言葉です。今わたしたちの目をを奪い、時には惑わす、仏教で言う「色」の世界、外界に見える物質的世界に一時目を閉ざすことによって、心の内に見えてくるものがある。絶えず聞こえる他人の意見やさまざまな雑音に耳を閉ざすことによって、心の内に聞こえてくるものがある。絶えずけたたましくしゃべり続ける口を静かに閉じることによって、心の内に新たな言葉が与えられてくる。これが神秘主義の基本的な構造です。宗教は多かれ少なかれこの様な神秘的な側面を持っているものです。ですから宗教経験とは、元来、(言語に表すことができない)言語化不能なもの、あるいは言語化するのが非常に難しいものです。しかし言語化不能なものを、言語の生き物である人間はなんとか言語に表そうとします(言語化しようとしています)。そのために、宗教の言葉には、象徴や比喩表現が多くなるのです。しかし(5)異言を解釈する力が与えられます。通常の方法や用語法で表現できない宗教経験を通常の方法

領域に翻訳（通訳）する力です。

またここで非常に興味深いのが、「信仰」(v.9)が霊の賜物とされていることです。「信仰」は与えられるものだということです。「信仰」が与えられるものと分かると、祈りは変わります。主よ「信仰をお与えください」という祈りがありうるということです。すると、与えられるものとしての信仰は、自家発電[の信心]ではなくなります。それは「**霊**」が**望むままに分け与えてくださる**賜物だからです。人は信仰を与えられるという経験を通して、信仰者として成長するのです。

次に現代世界ではオカルトの類いのように考えられていることが出てきます。まず(1)**病気をいやす力**、(2)**奇跡を行う力**、(3)**霊を見分ける力**(v.10)は、「異能」(異なる能力)と呼ばれて、超常的なものとして余りまともに取り上げられることはありません。しかしこのような**霊の働き**に、人間の合理的の枠や枷をつけないないことの方が大切です。人は自分の合理的によっ



て世界を閉じてしまっはいけないのです。わたしたちは常に神の可能性に対して開かれていなければなりません。それが信仰です。

教会を形成する**霊の働き**は「いろいろ」ありますが、すでに見ましたように「**同じ唯一の“霊”の働き**」であり、この「**“霊”は望むままに**」賜物を信徒の「**一人一人に分け与えてくださる**」のです。

説教の始めに、サグラダ・ファミリアのお話を致しました。着工は1882(明治15年)3月19日、初代建築家フランシスコ・ビリャールが無償で設計を引き受け、その任にあたります。その後意見の対立があり、翌年にビリャールが辞任し、2代目建築家である、当時無名のアントニ・ガウディが1926年に逝去するまで、ライフ・ワークとして建設に携わります。ガウディは仔細な設計図を残しておらず、大型模型や、紐とおもり錘を用いた実験道具を使って、構造を検討するという方法を用いました。ガウディの没後10年がたった1936年にスペイン内戦(1936年7月17日-1939年4月1日)が勃発し、それによってそれらの模型は破片となり、ガウディの構

想に基づいて弟子たちが作成した資料も大部分が消失してしまいます。職人による伝承や大まかな外観のデッサンなど残されたわずかな資料を元に、時代毎の建築家がガウディの設計構想を推測し現在も建設が続行されています。9代目設計責任者であるジョルディ・ファウリは、ガウディの没後100年にあたる2026年に完成予定と発表しました。

聖なる家族は一朝一夕に出来上がるものではないのです。「ゆっくり、しっかり」と建てていかなければならないのです。教会は神の御心を求めれば求めるほど、その絆を強くするのです。そして絆を強くすればするほど、よりいっそう神の心を心とする交わりを形成していくのです。

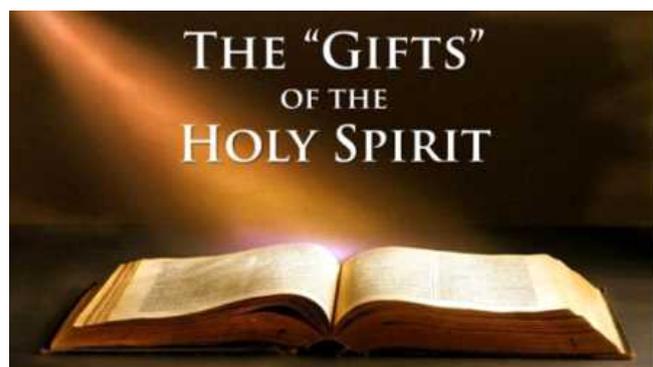
最後に来週ご一緒に読む、コリントの信徒への手紙12章の後半の1箇所を読んで終わらしましょう。12章14-27節。

12:14 体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。12:15 足が、「わたしは手ではない

から、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。12:16 耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。12:17 もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。12:18 そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。〔中略〕

12:25 それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。12:27 あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。新しい一週間も、主と共に歩んでまいりましょう。祈ります。

2019.3.10 日本基督教団千歳丘教会礼拝



12:1 兄弟たち、靈的な賜物については、次のことはぜひ知っておいてほしい。

12:2 あなたがたがまだ異教徒だったころ、誘われるままに、ものの言えない偶像のもとに連れて行かれたことを覚えているでしょう。

12:3 ここであなたがたに言っておきたい。神の靈によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖靈によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。

12:4 賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ靈です。

12:5 務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。

12:6 働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。

12:7 一人一人に“靈”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。

12:8 ある人には“靈”によって知恵の言葉、ある人には同じ“靈”によって知識の言葉が与えられ、

12:9 ある人にはその同じ“靈”によって信仰、ある人にはこの唯一の“靈”によって病気をいやす力、

12:10 ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には靈を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。

12:11 これらすべてのことは、同じ唯一の“靈”の働きであって、“靈”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。

12:1 Περί δὲ τῶν πνευματικῶν, ἀδελφοί,
οὐ θέλω ὑμᾶς ἀγνοεῖν.

² Οἴδατε ὅτι ὅτε ἔθνη ἦτε πρὸς τὰ εἰδωλα
τὰ ἄφωνα ὡς ἂν ἤγεσθε ἀπαγόμενοι.

³ διὸ γνωρίζω ὑμῖν ὅτι οὐδεὶς ἐν πνεύματι
θεοῦ λαλῶν λέγει· Ἀνάθεμα Ἰησοῦς, καὶ
οὐδεὶς δύναται εἰπεῖν· Κύριος Ἰησοῦς, εἰ
μὴ ἐν πνεύματι ἁγίῳ.

⁴ Διαρέσεις δὲ χαρισμάτων εἰσὶν, τὸ δὲ
αὐτὸ πνεῦμα·

⁵ καὶ διαρέσεις διακονιῶν εἰσιν, καὶ ὁ
αὐτὸς κύριος·

⁶ καὶ διαρέσεις ἐνεργημάτων εἰσὶν, ὁ δὲ
αὐτὸς θεὸς ὁ ἐνεργῶν τὰ πάντα ἐν πᾶσιν.

⁷ ἐκάστῳ δὲ δίδεται ἢ φανέρωσις τοῦ
πνεύματος πρὸς τὸ συμφέρον.

⁸ ᾧ μὲν γὰρ διὰ τοῦ πνεύματος δίδεται
λόγος σοφίας, ἄλλῳ δὲ λόγος γνώσεως
κατὰ τὸ αὐτὸ πνεῦμα,

⁹ ἑτέρῳ πίστις ἐν τῷ αὐτῷ πνεύματι, ἄλλῳ
δὲ χαρίσματα ἰαμάτων ἐν τῷ ἐνὶ πνεύματι,

¹⁰ ἄλλῳ δὲ ἐνεργήματα δυνάμεων, ἄλλῳ
[δὲ] προφητεία, ἄλλῳ [δὲ] διακρίσεις
πνευμάτων, ἑτέρῳ γένη γλωσσῶν, ἄλλῳ
δὲ ἑρμηνεῖα γλωσσῶν·

¹¹ πάντα δὲ ταῦτα ἐνεργεῖ τὸ ἐν καὶ τὸ
αὐτὸ πνεῦμα διαιροῦν ἰδίᾳ ἐκάστῳ καθὼς
βούλεται.